

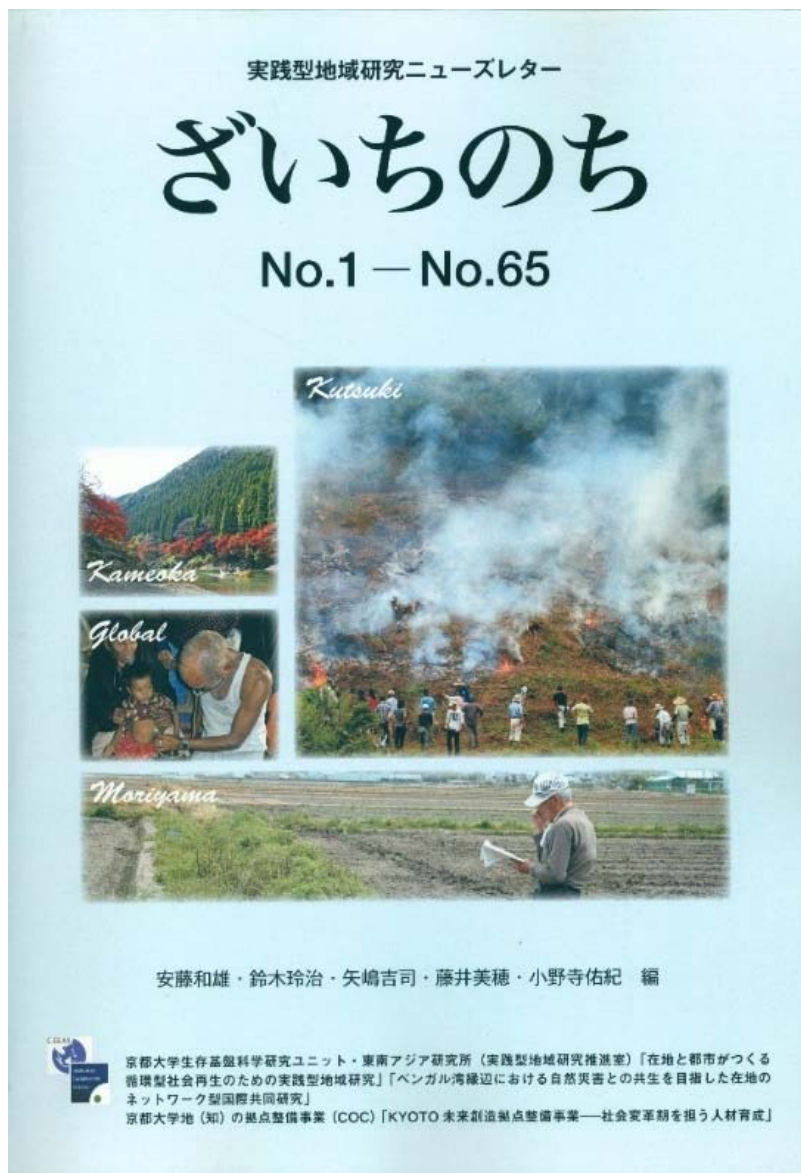
アジアと日本の農山村問題を相互啓発実践型地域研究で学ぶ

平成 25 年度活動報告

安藤和雄(東南アジア研究所)・岩田明久(大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)・深町加津枝(大学院地球環境学堂)・竹田晋也(大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)・坂本龍太(白眉プロジェクト・東南アジア研究所) 矢嶋吉司(東南アジア研究所)

1. はじめに：申請プログラム名とその目的

私たちは「アジアと日本の農山村問題を相互啓発実践型地域研究で学ぶ」という全体プログラムの傘下のもとに、個別プログラムとして(「まなびよし」の講義)として、以下の4つのプログラムをH25年度(2013年度)として申請した。プログラム1 京滋の地域の人々の活動に学ぶ「京滋の在地に学ぶ実践型地域研究」(H26、H27年開講 ポケットゼミ 前期月3、単位2、担当安藤和雄)、プログラム2 世界の農業の諸問題を地域との関連で学ぶ「自然と文化ー農の営みを軸にー」(H26、H27年開講 全学共通科目 前期水2、単位2 担当竹田晋也)、プログラム3 海外の農村にでかけて国際交流の中で京都の農村問題を考える「ブータンの農村に学ぶ発展のあり方」(H26、H27年開講 国際交流科目 前期集中 単位2 安藤和雄・坂本龍太)を平成26年度から開講する。加えて、プログラム4 京都の景観を実践活動から学ぶ「京都の自然と文化的景観を活かす」(H27年開講 ポケットゼミ、後期木2、単位2、担当深町加津枝)。これらのプログラムを準備した目的は、京都府、滋賀県下の農村地域においても、農業離れ、過疎化、高齢化、耕作放棄地の増加、林地の放置などの問題の進展は深刻であり、その影響により、地域に根ざし農村で育まれてきた生活文化や生活技術(伝統芸能、食文化、棚田などの農耕技術、林野利用技術、灌漑水利施設の維持技術)が消滅の危機に瀕している。一方でこうした問題を克服していこうという、農村伝統文化を基軸とした地域再生活動が各地域から個別におきつつある。また、過疎や離農の問題は、日本に特有ではなく、アジア諸国、なかでも国土の8割以上が森林地帯で、山岳地形に富んだブータンではこの問題に注目が集まりつつある。本プログラムでは、京滋の農山村の問題をアジア規模の視点から学ぶことも重視している。国際都市京都に相応しい視点となろう。そして、京滋の農山村では都会の模倣ではない、在地に根差した発想によって「伝統文化に基づく地域再生活動」が起きつつある。この活動に学び、支援する実践そのものが大学における研究と教育活動となることが大学にも求められている。地域に学び、地域を支援する人材育成のモデルともなろう。こうしたモデルの実践的な確立は、地域に根ざした大学としての火急の課題であると考え。このことを実現していく上で、既存のポケットゼミや全学共通科目、国際交流科目を平成26年度の「まなびよし」、「番組大学校」の授業科目として開講するための準備活動を2013年度に行った。



教材として使用を兼ねた実践型地域研究ニューズレター合本製本

2. 2013 年度の活動実績

1) フィールドステーションの拠点整備と会議、調査の準備、資料の整備

上記の公開講義の中で、平成 26 年度に開講する「まなびよし」の各科目は、いずれも担当教員が実施してきた京都、滋賀県、海外でのフィールドワークの活動とそれで培われた人間関係のネットワークが基盤となって開講される科目である。「まなびよし」では、教室内の座学、ゼミの形式で行われるが、時間が許す限り、授業内での野外講義、また、有志を募った課外ボランティア活動を行う。地域社会での人々との実践を通じた直接的な触

れ合いの中で学生が学んでいって欲しいと願っている。そのために、講義においても、京都大学の構内、そして課外の有志ボランティア参加による地域活動、地域で実践活動する人々による講義を平成 26 年度から積極的に取り入れていきたいと願っている。そのために、有志ボランティア学生たちの活動の拠点となるフィールドステーションの役割をになう南丹市美山町知井振興会や佐々里集落などの自治組織、亀岡市のプロジェクト保津川や亀岡市文化資料館、丹後半島の世屋地区の NPO 法人里山ネットワーク世屋、丹後藤織り保存会、合力の会、NPO 法人美しいふるさとを創る会、滋賀県守山市美崎自治会や NPO もやいネット、守山市役所などにそれぞれの担当者が出向き、現在進行中のフィールドワークによる協働作業をより綿密に振興させ、科目講義への招へい講師、現場での課外ボランティア実践学習活動の下準備のための会議や調査活動を具体的

に行うことが必要となる。拠点となるフィールドステーションの役割を担った上記機関との協働によるフィールド講義に必要な野外ポータブルスピーカー、ノート型パソコンや、連絡事務局を東南アジア研究所実践型地域研究推進室内に設置し、卓上パソコンなどの事務作業環境を2013年度の経費で整えた。また、プログラム1関連の2014年度の講義資料と地域の人々の活動を支援する意義から、従来のフィールドステーション活動で発行してきた実践型地域研究ニューズレター「ざいちのち」No.1～No.65の合本資料、講義で紹介する大川活用プロジェクト関連の「2013年度大川活用プロジェクト活動報告書」ならびに地元の人々が地元を知り、地元で暮らすことに誇りをもつための「みさき百科2014」を印刷製本した。

また、特に、プログラム4「京都山間部の自然と文化的景観を活かす」では、担当者の地球環境学堂の深町加津枝さんが、ワークショップを含めた参加型調査を2014年3月25日～26日にかけて実施し、下記の結果を得ている。

.....

第3回大川フォーラム

夏休み大川自由研究室から考えるこれからの大川
—大川等整備の基本的考え方の具体化に向けて—



【夏休み大川自由研究室】(テーマ:「誰から知る大川に暮らす」と自問)での大川での水質調査



【夏休み大川自由研究室】(テーマ:「誰から知る大川に暮らす」と自問)での行われた水質調査

守山市美術館
平成26年2月1日(土) 13:30~16:00
主催:大川活用プロジェクト
美濃自治会、守山市、立命館守山高専学校、京都大学(生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所)

平成25年度 大川活用プロジェクト活動報告書

美濃自治会、守山市、立命館守山高専学校、
京都大学(生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所)、
京都大学 地の拠点事業 (KYOTO未来創造拠点整備事業—社会変革期を担う人材育成)

「丹後半島における地域資源利用と景観保全に関する参加型調査」報告

地球環境学堂 深町加津枝

日時:2014年3月25-26日

参加者:学生19人 教員1人

現地指導者6人

現地では、以下のスケジュールにそって調査および議論を行った。

【3月25日】

海岸沿いの景観を活かした地域活性化に関する調査(講師:徳田誠一郎)

天橋立周辺の景観に関する調査(現地講師:小谷正)

飯尾醸造(環境に配慮し地域資源を活かした企業)での調査(現地講師:飯尾毅)

丹後半島の地域資源の利用に関する調査のまとめ、議論(現地講師:徳田誠一郎)

【3月26日】

宮津の漁業に関する調査(現地講師:徳田誠一郎)

教材として使用を兼ねた大川活用プロジェクト報告書

みさき百科

—大川とその周辺の自然と社会—

2014



「みさき百科」編集委員会（編）

教材として使用を兼ねた大川活用プロジェクトの
みさき百科

らの営みを引き継ぐ人がいなくなったからといって、無価値なものとはいえない。一方、外からであってもそれらを引き継ぐ若い人がいることは大切なので、これらの文化について外に発信していき、関心を持つ人を増やしていくべきと感じた。

*放棄された水田なども見られた一方で、依然として全体として美しい風景であったのが印象的であった。自然に行われてきた営みは全体として筋の通った美しい風景を形成するのだろうと思った。

*森林の管理、伝統文化の継承という点で面白いと思った。また見学した野小屋は標準的なサイズということだったが、想像以上に大きかった。また小屋自体も木材と土を固めて作られているので周囲の環境に負担がかからず良いと思った。

*和紙の作り方や種類、魅力を知ることができた。また伝統的な家屋を見学することで、当時の人々の営みを感じ取ることができた。和紙は現代でもアートとして活用されていて、活用法が最も見出しやすい材料だと思った。炭焼きや藤織りなども合わせ、山林資源や文化をこれからの時代どのように活用していくかが当面の課題だと思った。

.....

上世屋の里山林の利用と管理に関する調査（現地講師：吉岡徳雄、山形歩）

NPO 里山ネットワーク世屋の活動に関する調査（現地講師：吉岡徳雄、山形歩）

上世屋における伝統文化とあらたな市民組織の活動に関する調査（現地講師：井之本泰）

【学生の視点による丹後の景観や生業などに関する感想】

*天橋立を海の浸食の危険から維持・保護するために、当地の人が工事などの様々な活動を行っていることがわかった。また、船越の松など、人と一緒にいないと生きられない古い木。人間と自然は互いに支えていることを感じた。日本伝統的な部屋と庭など、伝統的な日本文化が感じることができた。

*東北の魚市場を昨秋、沖縄の魚市場を先日見てきたが、やはり地域によって獲れる魚種が全然違うのだと感じた。

*藤織りなど、今ではほとんど行われていないものでも、それしか持たない価値が本来あることがわかった。それ

2) 国際的視野を地域で育てる活動と資料の整備



過疎や離農の問題は暮らしの価値観、人生観の自覚的変革を伴わない限り、解決の糸口が見えない日本の農村地域が抱える深刻な問題である。また、この問題はアジアの国々、中でもブータンでは国土のほとんどが山地であり、その深刻さをましている。過疎や離農の問題をアジア諸国におけるグローバルな問題として位置づけ、国際協働によってより広い視点で地域から実践的に学ぶために、プログラム3では国際交流科目との合同により臨地教育をブータンで2014年度に行う予定である。その一方で、国際交流科目のカウンターパート機関でもあるブータンのシェラブッチェ大学の若手講師2名と学部生2名を、7月に約1ヶ月間と2014年2月に約2週間、科研費(安藤代表)などのプロジェクト、南丹市美山町知

井振興会との協働で、佐々里集落に招へいした。この招へいは2014年度には7月と2月(2015年)に2013年度と同様の期間ブータンのシェラブッチェ大学から招へいする予定である(しか

教材として使用を兼ねた国際会議報告書

し、2月については他の経費との兼ね合いで未定)。その際にプログ

ラム1やプログラム3の受講生たちに佐々里にて交流会をもつためと佐々里集落の受け入れの試行を行った。この期間に行った実践的な学習は、ブータンからの招へい者と京都の大学生ボランティアとの植樹や雪下ろしなどの集落支援活動、佐々里集落や他の集落の人々との交流、参加型農村調査であった。また、プログラム1や3の資料とする目的もあり、高知大学自然系農学部門「中山間」プロジェクトと京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室、京都大学地域研究統合情報センターが共催している「第5回文化と歴史そして生態を重視したもう一つの草の根の農村開発に関する国際会議—高知県大豊町2013年11月8日~10日—」報告書の出版を高知大学自然系農学部門「中山間」プロジェクトとともに支援し、上記会議の報告書を出版した。

3) 研究員と事務支援者の必要性

上記のプログラムと参加メンバーの人数からも理解してもらえるが、京都府や滋賀県のフィー

ルドステーションや国外との頻繁な連絡と予算管理、国際協働活動の現場でのサポートが不可欠で、非常勤研究員と事務支援者は事業を円滑にするため、ブータンからの招へい者の通訳や調査にも必須である。そのために事務補佐員1名、研究員2名を雇用した。

3. 2013年度の成果の総括と今後の展開

2013年度に予定された活動はほぼ予定通り実施することができた。特に、地（知）の拠点事業で2014年度、2015年度からは徐々に地域に学生たちを連れ出し、地域で活動される方々を「ま



写真1 2014年2月。京都からの大学生ボランティアとの佐々里での雪かき

なびよし」の講義の講師としてお迎えすることになる。「アジアと日本の農山村問題を相互啓発実践型地域研究で学ぶ」プログラムは、これまでの地域の人々との協働活動が土台となっているので、これまでの活動を報告書等として印刷することができたことは初年度として今後の展開に弾みがつく活動となったと評価できるだろう。また、南丹市美山町知井地区で実施したブータンの4名の方を招へいした活動も京都新聞や関西テレビのニュースなどでも取り上げられ、京都大学の地域での活動を市民にも知ってもらえるよい機会となった。2013年度の活動を土台に、2014年度には、「まなびよし」の講義とともに、現場でいかに京都の学生たち（京都大学とともに他の大学も含めて）に地域から実践的に学んでもらえるかの仕掛けや他の組織との連携が今後の大きな課題となるので、それを模索していきたい。

